

『20世紀の建築家 Le Corbusier の Paris を歩く』というテーマのもと、近代建築の巨匠 Le Corbusier の『プラネクス邸』『救世軍難民院』『ナジェセール・エ・コリ通りのアパート』『サヴォワ邸』を実際に見学してきた。

まず実際に行って驚いたのは、Le Corbusier の建築作品の前に右図のような『Histoire de Paris』という看板が掲げられていることだ。右図は『プラネクス邸』のものである。

“この住居は都会的建築家 Le Corbusier による数少ない建物の一つである。大通りに並び、共有の建物で囲んであり、庭とテラスは歩道橋で結んであるので、この住居は立体の上品さと資材の良質さを通じてしか見分けることはできない。美術品収集家の Antonin Planeix は 1924 年、パリの新しい取次店に連絡し、近代建築の巨匠と会い、その計画を依頼した。Le Corbusier は人間の身体の大きさに対して計算された空間、ユニテ・ダビタシオン説を作品に反映した。1927 年に完成されたこの住居は、ピロティの上に建てられ、二つの車道とすれすれで、借家人は住居兼アトリエとしても使用できる。”（自身訳）

これほどの詳しい説明が、他にも『救世軍難民院』『ラ・ロッシュ＝ジャンヌレ邸』でも見ることが出来た。これによって、フランスにおける Le Corbusier の認知度を改めて感じた。

また今回見学した建築のほとんどが 1920～30 年代の作品であるにも関わらず、現代人の私の中で見ても、全く見劣りせず、むしろ未来を予感させるようなオーラがあったことに圧巻した。どの建築も多少の改修を経ているとはいえ、今もなお人々が生活するには何の不自由もない様子だった。実際、『救世軍難民院』などは難民院として機能しているため、見学もロビーと地下階まで、写真の撮影も制限される。『プラネクス邸』も外観のみ見学可能だったため訪れてみたが、やはり普通の住宅として未だに使用されているようだった。周囲も同じ高さのアパートが密集している地区に建てられているため、近代建築の祖と言われた Le Corbusier の作品があるとは到底思えないような雰囲気、注意していないと見落としでしまいそうであった。



しかし、説明文にもあった通り、外観からは想像もつかない緻密な計算がこの作品にはされているということが Le Corbusier のすごいところである。『プラネクス邸』の説明文にはなかった例を挙げるなら、^{のこぎり} 屋根のトップライトから最上階にあるアトリエを光で満たす設計がしてあることである。この設計は、照明の使用を軽減できるという点で、現代に置き換えても環境保全に有効である。またこの『プラネクス邸』でも採用され、Le Corbusier の提唱した近代建築五原則のひとつでもある、屋上庭園は、エコを考える上で非常に重要なオプションである。

もちろん日本とフランスでは文化や気候が異なるため、建物の耐久性なども根本的に異なっているとは思いますが、Le Corbusier の驚くべきところは、建物としての機能はもちろんのこと、現代においても生き抜くことの出来る設計の先駆性にあると思う。



『ナジェセール・エ・コリ通りのアパート』は、先駆性と実用性を共に兼ね備えた作品のひとつであると思う。まず外観だが、鉄とガラスブロックで出来ており、Le Corbusier の典型的デザインとは食い違っている。この外観を見る限りでは、このアパートが1930年代初期に建てられたものだととても思えない。しかし、このアパートは現在も住居としての機能は十分に果たしている。Le Corbusier が晩年まで妻と暮らした7,8階は Le Corbusier 財団の管理の下、見学が出来るようになっているが、その他の階には人が住んでいる。

この作品の先駆性はまず先にも述べた外観にある。このアパートの窓のサイズ、バルコニーの手すりは対面する通りの高さに順応させているが、通常重々しい石積みの壁である部分を、光を内部まで導くガラスブロックにすることで、伝統的建築物を逆転させた形で成立させている。このガラスブロックの設計によって、内部は光に満ちている。また、ガラスブロックだけでなく屋上庭園に続く階段もガラス張りにすることで、光を取り込めるようになっており、庭園と同じ階にある寝室や、階段下の玄関付近が自然光の柔らかい雰囲気包まれている。その他、随所に光を取り込む小窓があり、換気などの用途ではなく、いわゆる“明り取り”的な意味であろう窓が多く見受けられた。





『救世軍難民院』の外観は『ナジェセール・エ・ゴリ通りのアパート』に通じるものがある。一面がガラス窓で、横列ごとに赤・青・黄などの彩色が施されている。建設当初（1920年代後期）は完全密閉された全面ガラスで、ダブルスキンにしたカーテンウォールの中に空気を循環させるといった自然換気を必要としない空調システムを採用していたという。しかしこのシステムによって内部の温度

上昇が問題化し、結果的に、数回の改修後には現在の四角い窓割りに変わり、システムは機能しなくなった。Le Corbusier自身が“正確な呼吸”と呼んだというこのシステムも、結局は夢に終わってしまったが、やはり“住む”と“生きる”という行為に密着したLe Corbusierの先駆性の表れであろう。



ロビーは外観と同じくカラフルに彩色されたイスやドアや受付、すりガラスの壁があり、広さのわりには人も多くはなく、“難民院”という施設なのだとすることを改めて感じた。ロビーだけでは“住居”というよりは、公民館などの“公共の施設”という雰囲気が強かったように思う。Le Corbusierのような世界的建築家を作った作品でも、用途によって建物から得られるオーラというものはガラリ

と変わるということを実感した。どんな意図を考えて建築したとしても、それは机上の論であって、実際にその建築の雰囲気を決めるのは、長い年月を経てきたそこに“住む”人々なのではないかと思う。

ロビーから一步部屋の中へ入ると、また雰囲気は違った。右図は施設で働くスタッフの事務所として使われている部屋だが、大きな窓から光が入り、白い壁と白い柱があり、ここがLe Corbusierの作品の中なのだとすることを思い出させてくれる。おそらくこの窓も、“正確な呼吸”をしていたシステムの一部だったのだろう。しかし今は今で、21世紀のオフィスと非常に自然に溶け込んでいくように思った。





左図はロビー正面のすりガラス部分、中央はロビーにあるイス、右図は地下階の部屋である。

この『救世軍難民院』は、外観と内装の色が統一されている。赤・青・黄をベースとして、建物のいたるところで Le Corbusier カラーが見られる。Le Corbusier は『サヴォワ邸』に代表されるような“白の時代（ピュリスム作品）”を意識した作品が有名であるが、この『救世軍難民院』や『ナジェセール・エ・コリ通りのアパート』のようにポップな彩色を施した作品も多数ある。個人的には日本では考えられないようなこの彩色が、フランスでは90年近く前に実現されていたということに驚いた。日本では少々奇抜な建物が設計されて、近隣住民と論争を繰り広げるといことがしばしばあるが、フランスでは公の施設として受け入れられているということに思想の違いを感じた。おそらく日本で似たようなことをしようとすると、彩色の点だけ考えれば、こんなに徹底した Le Corbusier カラーは出せないだろう。せいぜい内装の一部に使われる程度で、外観まで彩色を施すことは無理ではないかと思う。（しかも外観の彩色を作者の死後行うということも難しいと思う。）この寛容な土壌が、“芸術の都”と称されるパリの所以ではないだろうか。Le Corbusier の先駆性は（パリだけでは受容できなかった都市計画は、他国で実施されているが）、パリのおかげでもあると言える。パリが“芸術の都”でなければ、Le Corbusier もこんなにたくさんの作品をパリに残すことは出来なかつただろうし、近代建築の祖と称される今の Le Corbusier 像も存在しなかつたのではないだろうか。

“Le Corbusier の先駆性”は彼の提唱した【近代建築五原則（①ピロティ②屋上庭園③自由な平面④水平連続窓⑤自由な立面）】の中でも、今回特に屋上庭園ではないかと思った。先にも述べたように、現代においてはエコの観点からとても重要な要素であるし、ビルに屋上庭園を作ることヒートアイランド現象を避けようという試みもあるくらいだ。Le Corbusier はそこまで考えてはいなかつただろうが、近代建築五原則のうちのひとつに数えるほど重要視していたことは間違いない。実際に今回見た作品でも、ほとんどすべてに、規模に差はあれど、屋上庭園は設置されていた。

また積極的に日光を取り込める大きな窓（もちろん水平連続窓も）は、照明の削減が可能である。行って初めて気づいたが、Le Corbusier の建築はどれも光の使い方、取り込み方が見事だった。やはり日光は人間を落ち着かせる柔らかさがあり、それが建物内部の雰囲気

気を“作品”から“住居”に変えていた。

この二点は、私が環境問題に着目して感じた“先駆性”である。そしてもうひとつの“先駆性”は『救世軍難民院』で挙げた内装・外観に見られる件である。

90年近く時を経た21世紀の現代においても、人々の目を引く彩色、問題なく使用できる設計に驚いた。ただ奇抜なだけでは何にもならないし、使い物にならず、人々にすぐ忘れ去られるものだが、Le Corbusier の場合は人々に受け入れられるものを作り上げた。人を驚かせるのは簡単だが、納得させるのは難しい。しかし Le Corbusier はその両方をやってのける裏づけされた“先駆性”を持ち合わせている。

この研究旅行で、それまで“勉強”として接していた Le Corbusier の建築作品に実際に触れて回ることが出来た。“勉強”とはとても他人行儀なもので、愛することは難しいが、そこを超えてパリまで赴き、実際に Le Corbusier の作品に包まれることで、モチベーションががらりと変わった。“Le Corbusier の先駆性”というレポートテーマも、出発以前に“勉強”として接した Le Corbusier から得て考えたものだったが、実際に作品を見ると、漠然としていたテーマのヒントが次から次へと目の前に現われた。

Le Corbusier の建築を訪れた際、Le Corbusier 財団の方や、施設のスタッフの方と最低限ではあるがフランス語でコミュニケーションが取れ、フランス語を勉強する意欲もかなり高まった。

メインのひとつにいていた『ラ・ロッシュ＝ジャンヌレ邸』が改修工事のため、外観だけになってしまうというアクシデントはあったが、その分、予定していなかった小さい作品もまわることが出来、結果的にはとても有意義だった。

研究旅行要旨

小原あゆみ

2008年8月28日

福岡出発

香港経由 パリ着

1 日目

市内散策

2 日目

プラネクス邸 見学

救世軍難民院 見学

3 日目

市内散策

4 日目

救世軍難民院 再見学

5 日目

ラ・ロッシュ邸 見学

ナジェセール・エ・コリ通りのアパート 見学

サヴォワ邸 見学

9 月4 日

パリ出発

香港経由 福岡着

「20世紀の建築家 Le Corbusier の Paris を歩く」というテーマのもと、フランスのパリに5日間滞在。

8人という人数だったため、まずはパリで巡る Le Corbusier の作品を10件ほど挙げたうえで、各自の演習での自由研究テーマや希望を加味して回る作品を振り分けた。また、Le Corbusier の代表的作品とされるラ・ロッシュ邸とサヴォワ邸は、4人ずつですれ違うようにして訪れる形をとった。

レポートのテーマの重複を避けるために、事前に全員が各自のテーマを提示し、そのテーマに沿って見学した。